

上智大学

二〇二一年度一般選抜（学部学科試験・共通テスト併用型）

学部学科試験サンプル問題

文学部 フランス文学科

【学部学科試験名】 フランス文学・文化・歴史に関するテキストの読解力および思考力・表現力を問う試験

【試験時間】 七五分

【出題の意図、求める力等】

フランスの文学、文化、歴史に関する論説文を出題して、読解力、表現力、および基礎的なフランスについての知識を問う。
フランス語やフランス語圏の文化、社会についての柔軟で論理的な思考力や、自己とは異質なものを理解する意欲や関心の度合いを測る。

※サンプル問題の出題形式は例であり、問題数は本試験と異なる場合があります。

一 次の文章は、竹田篤司の著作『フランス的人間―モンテーニュ・デカルト・パスカル』の序文である。これを読んで、後の問に答えなさい。

〈フランス的人間〉とは何であろうか。

フランス人なら、だれもがそうであるわけではない。「平均的」フランス人という意味でもない。一読書生にすぎない私に、そのような「フランス人」について論ずる資格はない。私のいう〈フランス的人間〉とは、私の信じる〈フランス的精神〉の典型である。

フランスの哲学や思想を細々と読み継いできた私は、次第に、そこに一貫して流れている精神は、フランス語でいう〈サンス〉SENS というものではないかと考えるようになった。□□^(あ) それは、私の創見でもなければ、発見でもなく、むしろ定説にほかならない。□□^(い) 私は、その道筋として、こう辿ってみたいのである。――

人間は「知る」ことよって人間となる。そしてそこから、哲学が誕生する。理性とか知性とか呼ばれるものは、この領分に属している。□□^(う) 同時に人間は、「感じる」存在である。生理や感覚はこちらの領域であり、そのはたらきは、かならずしも人間独自のものではない。人間らしく「感じる」ため、□□^(え) 単に喜び、楽しむだけではなく、「味わう」^aことができるようになるためには、知性の介入が不可欠になる。前者の「知る」についても、同様であろう。単なる理性的・数学的な厳格な認識だけが、「知る」ではない。人を「知り」、相手を「識り」^(一)、その心が「分る」ようになるためには、正しく「感じる」力がなくてはならない。

□□^(お)、そこで、人間がより、人間的であるためには、「知る」comatireと「感じる」sentirが、次第に接近してくることになる。□□^(か) 「知性」がより、「感性」化され、「感性」がより、「知性」化され、その両者のはたらきが、こもこも極限にまで達して融合するとき、そこに生成される場を、フランス人は〈サンス〉と名づけるに至ったのではあるまいか。――〈サンス〉という語を、日本語に置き換えることはできない。

このような〈サンス〉を〈フランス的精神〉の核心に据えてみると、フランス哲学の特質とされてきたものの意味が、私にはよく分るようになる。こゝにしか存在しないからだ。明晰な論理と鋭い直観、日常的・具体的なものへの繊細鋭敏な洞察、表現方法と形式の多様は、その「獵」のための必須の武器である。逆に、(人間的次元からして)あまりにも高いところ、あまりにも深いところ、あまりにも突飛ないし奇妙な場所にあるものに対しては、〈サンス〉の磁力は、微弱になってしまふ。天空への飛翔や飛躍、鶴嘴を振るつての坑夫の仕事は、〈サンス〉には似合わない。〈フランス的精神〉のもつ限界であり、その点は、とかく〈ドイツ的精神〉や〈スペイン的精神〉の後塵を拝する^(二)ことにもなるであろう。しかしそれは、それぞれの〈精神〉の「個性」の問題である。

モンテーニュ、デカルト、パスカルという、本書の主幹をなす三人の大思想家は、いずれも(それぞれのあり方・やり方を通して)そのような〈サンス〉の体現者であった。と同時に、〈サンス〉の伝統をつくり、それを現代にまで息づかせるに至った功労者たちでもある。あえて^(三)〈フランス的人間〉と称するゆえん^(四)である。

問一 文中の(あ)(い)、(う)(え)、(お)(か)に入る語の組み合わせとして、もっとも適切だと思われるものを選択肢から選びなさい。

1 (あ)(い)

- | | |
|----------|------|
| a. とはいえ | なぜなら |
| b. もちろん | ただ |
| c. したがって | それでも |
| d. いわんや | たとえば |

2 (う)(え)

- | | |
|---------|------|
| a. すなわち | あるいは |
| b. また | けれども |
| c. そのうえ | ともかく |
| d. しかし | つまり |

3 (お)(か)

- | | |
|---------|---------|
| a. さて | そして |
| b. ところが | もしくは |
| c. しかも | なにしろ |
| d. ただし | にもかかわらず |

問二 傍線部(1)～(4)の語や表現の文中の意味として、もっとも適切だと思われるものを選択肢から選びなさい。

1 (1) 相手を「識り」

- 相手についての情報を集め
- 相手の生活パターンに慣れて
- 相手の人間関係を把握して
- 相手と関わりを持ち

2 (2) 後塵を拝する

- a. 追いつかれる
- b. 羨ましく思う
- c. おくれをとる
- d. 上をゆく

3 (3) あえて

- a. 同意してもらえらと思うが
- b. そう言うだけの価値があるものとして
- c. わざわざ言うまでもないが
- d. 常識的なこととして

4 (4) ゆえん

- a. 意向
- b. 事態
- c. 立場
- d. 理由

問三 それぞれの説明は、モンテーニュ、デカルト、パスカルのうち、誰についてのものか、その名前を答えなさい。一人の名前は、一度しか記入してはならない。

1 (1) 理性を信じ、自由意志を重んじつつ、知恵と徳の合一をめざした。オランダで隠棲した。

2 (2) キリスト教思想家でありながら、数学や物理学でも偉業をなした。

3 (3) 「われ何を知る？」を座右銘としたモラリストの始祖で、ボルドー市長だった時期もあった。

問四 傍線部 a と b の語と表現の意味を、それぞれ文中の表現を用いながら、40字以内で説明しなさい。

(1) a. 味わう

(2) b. 〈サンス〉の磁力

問五 文中で筆者が言う〈フランス的人間〉とは、どのような人のことか。文中の語や表現を用いながら、90字以内で説明しなさい。

二 次の文章は、安藤元雄の著作『椅子をめぐって』からの抜粋である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

知性の抒情

芸術家の名声などというものはどうせ「誤解の集積」にすぎないのかも知れないけれども、堀口大學の場合には、とくにそれが**はなはだしい**（あ）ように思えてならない。もちろんこの詩人はすでに芸術院会員でもあり、数年前から予告されていた『堀口大學全詩集』も一千ページをこえる分厚い限定本となつて、最近刊行されたばかりである。その中で、処女詩集『月光とピエロ』（一九一九年）に収められていた『夕ぐれの時はいい時』などの作品は教科書にも採られてひろく知られているし、かりに彼の詩作をまったく知らないという人でも、どこかで「堀口大學訳」として読まれた近代フランス文学の翻訳に一度は出あっている筈だ。だから私たちは、彼を「不遇の詩人」と呼ぶことはできないだろう。（う）
それどころか、多くの愛読者の敬意をあつめているという意味でなら、むしろ「幸福な詩人」と呼ばなければならないところだ。しかしそれならば、詩人としての彼の業績が正当に評価されているかどうかという点になると、見方によっては堀口大學ほど手ひどい**忘恩**（お）にさらされている例も少ないと思われる。

ひとりの詩人が私たちに何を与えてくれたか、その寄与の大きさはかるには、彼がその作品によつて私たちの言葉を——語彙や語法を——どれほど豊かにしてくれたか、言いかえれば私たちに言語表現の可能性をどこまで押しひろげてくれたかによるほかないのだが、この意味からすれば、『月下の一群』（一九二五年）を頂点として大正末年から昭和初頭にかけて夥しくくりひろげられた堀口大學の訳詩と、『月光とピエロ』『水の面に書きて』『砂の枕』などの詩作は、そのあと、おそらくは第二次大戦後のいまにいたるまでの、昭和期の口語の使い方に決定的な影響を与えていると言つても言いすぎではない。ところが、いざ堀口大學の詩作に対する評価となると「都会風のダンディズムの詩」「風俗的な軽い機智の詩」「しゃれてはいるがただそれだけの遊びの詩」といったような、軽視をこめた評語を聞かされることが多く、多くの詩人たちが直接間接に彼のつくり出した語法のおかげをこうむりながら、ことさらに彼を「ただの翻訳家」と片づけてすましてきた。重々しいもの、深刻なものにしか私たちは価値を見いださないのであるか。私が忘恩といつたのはそれである。

詩人自身がこう歌っている。

私の詩の中に真実がないといふので

人たちは私の詩を好まない

私の詩は私の夢なのだ

そして夢ばかりが私の真実なのだ

その言葉どおり、堀口大學は言葉によつて夢を見る⁽²⁾。ことを知っている人である。そうでなかったら、近代から現代にかけてのあれほど多種多様なフランスの詩人たちの作品を《楽しみながら》翻訳するなどという作業は、できる筈もなかったろう。今度の『全詩集』の中でも過半のページを占めている彼の訳詩は、そのように詩人としての彼の資質そのものに根ざしているという意味で、当然「作品」のうちに数えられなければならない。そこには、たとえばルミ・ド・グールモンの

シモン、外套を着よ、黒塗の厚い木靴を履け、

二人して霧の中を行かう、船に乗った人のやうに。

というルフランにも見られるような、四十五年後のいま読んでもなお新鮮な日本語がある。その新鮮さを支えていたものは、単なる都会的な気取りではなく、当時の彼がフランスの詩的風土の中に発見した、感傷におぼれない、知性の抒情⁽³⁾。とても呼ぶべきものであった。

これらの訳詩が、当時これからの書き出そうとしていた若い詩人たちにどれほどの力を与えたかは、三好達治や伊藤整のちに自分から証言しているところでもあるし、その他多くの詩人たちの語法の中に⁽⁴⁾「ぶさ⁽¹⁾」⁽⁵⁾ 検証できるところでもある。堀口大學はこうしてフランス詩を読んで訳すことによつて得たものを自作の詩においても実行したのであって、たとえばさききその題名をあげた『夕ぐれの時はよい時』においても、

夕ぐれの時はよい時、

かぎりなくやさしいひと時。

という二行のルフランにあらわれる「よい」という形容詞は、フランス語の形容詞「bon」のもつあらゆるニュアンスを伝えながら、同時に「吉野よく見よ⁽⁶⁾」⁽⁷⁾といった古い時代の日本語の「よし」をも想起させて、それによつて現代口語の「よい」の使い方を無限に富ませ、その意味内容につややかなふくらみを与えた。⁽⁴⁾ この大胆な使用がなかったら、「よい」という形容詞は、いまだに「善良な」といった大ざっぱな、味気ない意味しか持てなかっただろう。

現代口語が本当に詩語としての資格を獲得したのは昭和に入ってからであり、その後、口語の表現力は一見乱雑に見えながらもますます柔軟に、自由自在になつて来ているが、その自由を現代口語に与える口火を切つた⁽⁸⁾ 人の一人が堀口大學であつた。たしかに彼は文語表現をも多用するけれども、その文語はしつめらしく⁽⁹⁾ 口語の上に君臨するものではなく、いつのまにか口語の振幅の中にとりこまれ、口語の自由さの一例証となつて見えている。この点に関する限り、堀口大學はたとえば三好達治や佐藤春夫よりもっと自由な詩人だと言えよう。

彼の詩において問題とされるべきものは、「機智」などではなく、この「自由」である。

地婆
鬼婆
牙
八重歯
行くさき墓場
途中に焼場

『呪詛の歌』と題するこの短い詩に註がついていて、こうある。《地婆は地主の婆さんの略なり。一篇、彼女の悪意に対するレジスタンスのうたなり》。

この詩を機智の詩として読んで、せつかくの脚韻^(E)が駄じやれにもならない。因業な地主の老婆に苦しめられた詩人が、詩の中で痛烈なタンカを切つて自由を回復する、その一方的な呪詛のおかしさが私たちを哄笑させる^(F)のだ。現在の若い詩人たちが、さまざまな試行錯誤の中で懸命に手に入れようとしているのも、おそらくはこうした「自由」^(E)にはかならないのである。

問一 傍線部(あ)～(お)の言葉の文中の意味として、もっとも適切だと思われるものを選択肢から選びなさい。

(あ) はなはだしい

- a. おそろしい
- b. こっけいな
- c. いちじるしい
- d. 長く続く

(い) つぶさに

- a. くつきりと
- b. 詳細に
- c. ひんぱんに
- d. 広く

(う) 口火を切った

- a. きっかけを作った
- b. 口実を作り出した
- c. 面白さを理解した
- d. 意味を考えさせた

(え) しかつめらしく

- a. かたくるしく
- b. 一様に
- c. 気まぐれに
- d. 軽やかに

(お) 哄笑させる

- a. 苦笑いさせる
- b. ほくそ笑ませる
- c. 微笑ほほえませる
- d. 大笑いさせる

問二 傍線部(1)～(5)は文中でどのようなことを意味していますか。もっとも近いものを選択肢a～dより選びなさい。

(1) 忘恩

- a. 詩人のしやれた作品を楽しみながらも、翻訳ばかりしていると非難すること
- b. 詩人が口語の使い方に決定的な影響を与えたと知りながら、その翻訳の価値を軽視すること
- c. 詩人が日本語の語彙や語法を豊かにしたことを知りながらも、詩人として評価しないこと
- d. 詩人の作品を表面的に読み、作品に真実が欠けていると軽蔑すること

(2) 言葉によって夢を見る

- a. フランス詩の翻訳をしながら、原文に描かれている世界に入り込む
- b. フランス詩を翻訳することで、原文からいったん離れ、空想の世界をさまよう
- c. フランス詩の翻訳をしながら、言葉から想像力を受け取り、それをふくらませていく
- d. フランス詩を翻訳することで、日本にはないフランス的な風土を作り出す

(3) 知性の叙情

- a. 都会的な感覚と風景描写の両方にもとづいた情緒
- b. 感傷を抑えて知性的に吟味され、とぎすまされた情緒
- c. 新鮮な言葉で表現された、論理を優先した感情表現
- d. フランス的な知性に影響された、日本的な感情表現

(4) 意味内容につややかなふくらみを与えた

- a. 「よい」という言葉に、フランス語が持つ意味と日本語の和歌に見られる意味合いを重ねて、語を豊かにした
- b. フランス詩には存在しない、和歌の深遠な言葉の響きを、「よい」という言葉に与えた
- c. 「善良な」といった意味の味気なさを、「よい」という言葉から取り払った
- d. 「よい」という言葉に、人がいかなるイメージをも投影できる可能性を開いた

(5) 自由

- a. 文語の方が口語よりも高尚なものだという既成観念を壊すこと
- b. 詩作を通して、庶民が身近に感じる日本語を作り出すということ
- c. 既存の言葉の種類や詩の形式を束縛と感ぜない自在な想像力を持つということ
- d. 詩の中で古い慣習を老婆にたとえ、その悪い影響力を思いきり批判すること

問三 傍線部(A)「私たちは、彼を「不遇の詩人」と呼ぶことはできないだろう」と言える理由を、日本語三十五字程度で記しなさい。

問四 傍線部(B)「脚韻」とは本文では具体的にどのようなことを指していますか。日本語二十字程度で記しなさい。

注

* 『万葉集』にある、天武天皇作とされる次の歌のこと。

よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見つ

(巻一、二十七)

【解答(例)】

問一

- 1 (あ) (い) b
2 (う) (え) d
3 (お) (か) a

問二

- 1 (1) d
2 (2) c
3 (3) b
4 (4) d

問三

- 1 デカルト
2 パスカル
3 モンテーニュ

問四

- (1) 生理や感覚を通して感じるだけでなく、知性や理性によって対象を理解する。(35字)
(2) 高度に働く知性と感性の融合によって得られる、日常的・具体的な人間探求の力。(39字)

問五

知性と感性を研ぎ澄ませて得られる高い人間性を持ち、明晰な論理と鋭い直観、日常的・具体的なものへの繊細鋭敏な洞察、表現方法と形式の多様性をもって人間を探究すること。(83字)



問
1

(あ) c

(い) b

(う) a

(え) a

(お) d

問
2

(1) c

(2) c

(3) b

(4) a

(5) c

問3 堀口大學は文学者として認められ、フランス文学の翻訳も広く知られているから。(37字)

問4 詩の各行の最後を「バ」という音で揃えること。(22字)